シャンカラ派における救いの意味構造

澤 井 義 次

はじめに

シャンカラは不二元論ヴェーダーンタ哲学において、完全な属性を具えた最高の人格神、すなわち有属性ブラフマンに対して、無属性ブラフマンの優位性を説いた。さらに解脱のためには、ブラフマンの知識 (jñāna) ⁽¹⁾こそが肝心であることを強調した。ところが一方、シャンカラ派総本山のシュリンゲリー僧院において、伝統的に尊重されてきたシャンカラの伝説的伝記 (『シャンカラの世界征服』では、無属性ブラフマンの世界も有属性ブラフマンの世界も、ともに「最高の境地」(param padam) ⁽²⁾として並置されている。シャンカラに伝統的に歸せられるバクティ頌 (bhakti-stotra) ⁽³⁾でも、救いのために神へのバクティ (信愛) が強調されている。こうした事實は、シャンカラの思想がシャンカラ派において、いかに受け入れられてきたのかを示している。本稿では、こうした事實を踏まえて、シャンカラ派における救いの意味構造を考察したい。と

りわけ、シュリンゲリー僧院において、現在、第三十六代目の世師 (シャンカラ・チャリーヤ) ⁽⁴⁾であるバラティー・ティールタ (Bharatittha) ⁽⁵⁾が、人びとの救いのために、どのように教えを説いているのかに焦点を当てながら、世師の逸話を読み解いてみたい。

議論に入るまえに、平成二十八年日本印度学仏敎学会第六十七回学術大会の特別部会テーマ「インド学・仏敎学の歴史と未来」に沿って、シャンカラ研究の歴史と未来について、宗敎学の視座から少し言及しておきたい。従来のシャンカラ研究では、シャンカラの著作が文献学的に真作と偽作に識別され、真作と認められる著作に依拠して、シャンカラの思想の特徴がインド思想史の中で説明されてきた。シャンカラを開祖とするシャンカラ派の具体的な思想や信仰については、ほとんど研究されないままであった。シャンカラの真作だけに依拠した文献学的な研究は、シャンカラ派の宗敎的な脈絡から切り離されたものであったと言えよう。シャンカラの思

想は、彼を開祖とするシャンカラ派において、文献学的に偽作と判断されるバクティ頌も含めて、人びとの信仰の指針として救済論的意義を担ってきた。それは「生きた教え」として時代を越えて継承されてきた。こうした事実を踏まえるとき、これまでのシャンカラの思想に関する文献学的・解釈学的研究と併行して、シャンカラの思想をシャンカラ派という宗教的脈絡へと引き戻し、その宗教的な意義を明らかにしようとする宗教学的な研究も、もう一つ別のシャンカラ研究のあり方を示していると言えるであろう。

一 「師と弟子の関係」の二重性

さて、ここではまず、シャンカラ派僧院の法主である世師(jagadguru)が、その伝統の信仰者とのような関係にあるのかを確認しておきたい。僧院はシャンカラが創設した当初、出家遊行者(サンニヤーシン samnyasin)の修行の場であった。シャンカラを師と仰ぐ出家遊行者は「弟子」(sisya)として、シャンカラの指導に依って解脱へ向けて修行に専心してきた。シャンカラと出家遊行者のあいだには、「師と弟子の関係」(guruśiṣya-sambandha)が存在した。この関係は今日まで、世師と出家遊行者のあいだで継承されてきた。さらに十四世紀になつて、在家信者たちが僧院組織の中へ有機的に組み込まれることによって、在家信者たちも自分たちを世師の「弟子」

と呼ぶようになった。ここに出家レベルと同じように、在家レベルにおける「師と弟子の関係」も成立した。シャンカラ派では、「師と弟子の関係」の二重性が成立したのである。

在家信者と世師のあいだに、「師と弟子の関係」が存在するとは言っても、その意味は出家遊行者の場合とかなり違っている。在家信者は出家遊行者と違って、解脱を求めて修行に専心しているわけではない。世師バーラティー・ティールタは在家信者に対して、カルマン(karma 行為)とバクティ(bhakti 信愛)を勧めている。世師によれば、不二一元論の教えは私たちの苦を取り除くうえで最終的なものであるという。そこでまずは、神へのバクティとともに、ヴェーダ聖典に規定されるカルマンの遂行が勧められる。それらは「心の浄化」につながるという。師が真理を説くとき、浄化された心をもつ人は真理があるがままに理解することができると世師は言う⁽⁵⁾。シャンカラは周知のごとく、ブラフマンの知識(jñāna)だけが解脱の直接的な手段であることを強調し、いわゆる知行併合論(jñānakarmasamuccaya-vāda)に反対の立場を採った。一方、出家遊行が不可能な場合、解脱への準備としてカルマンとバクティがブラフマンの知識を獲得するまで必要であることを説いた⁽⁶⁾。今日、在家信者たちが実践するカルマンやバクティは、シャンカラの解脱論の視点からみれば、「心の浄化」(citta-suddhi)と救済論的意義をもっている。

世師が説くように、真理を理解するためには、師(guru)の存在が不可欠である。世師バーラティー・ティールタは、真理の知識が「師からのみ獲得することができ」ことを強調する。シャンカラ派の知識人の一人、チャンドルは「師の言葉から獲得される知識のみが力をもっている。師がいなければ、私たちがたとえどれほど多くの文献を学んでも、知識を獲得することはできない」と言う⁽⁷⁾。さらに世師がだれに対しても強調していることは、「人びとがまず、師、神さらに聖典への確固たる信仰を培うべきである」という点である⁽⁸⁾。このことはグル・バクティ、神へのバクティ、聖典へのシウラッダー(śrādhā 信)の重要性を説いてきたシャンカラ派の伝統的な信仰を端的に表現している。

二 在家信仰における救いとその様態

次に世師バーラティー・ティールタの逸話を手がかりとして、在家レベルにおけるグル・バクティの具体例をいくつか取り上げ、シャンカラ派の在家信仰における救いの様態を考察したい。まず、一つの逸話によれば、ある在家信者が三歳の孫娘を悩ます心の病いについて、世師に相談した。世師はシュリンゲーリ僧院の礼拝(プージャ pūjā)で与えられる「お守り」(aṅga)を与えた。その信者はそれを受け取った後、孫娘の病いは次第に治ったという。別の逸話によれば、シュ

リンゲーリ僧院で働いたことのある在家信者が深刻な病気になるって入院した。長期の入院が必要とのことであった。そのことを聞いた世師は心配になって、その信者のために別の信者に「プラサーダ」(prasāda 儀礼のお下がり)を渡して言った、「彼は大丈夫です。次の礼拝(プージャ)には出られるでしょう。」すぐにプラサーダが病院に届けられ、それを病人の信者の額に当てたところ、医者が驚くほど早くに回復した。その信者は世師が行なう礼拝に出席した。そのとき、世師は「奇跡を起こしたのは、(シュリンゲーリ僧院の)シャラダーンバー女神の恩寵です」と言った⁽¹⁰⁾。多くの巡礼者は各地からシャラダーンバー女神の恩寵を求めて、シュリンゲーリを訪れている。

さらにもう一つ別の逸話によれば、シュリンゲーリ僧院を訪れた在家信者は、自営業を営んでおり、経営に苦しんでいた。彼は「マントラ (mantra) を授けてほしい」と世師に願い出た。翌日、世師はマントラを与えて言った、「このマントラを唱えなさい。そうすると、あなたの願いは何でも叶います。」その信者はうれしくなり、それから二日間、シュリンゲーリに滞在して、世師の住居でマントラを唱えた。その後、自分の元の場所へ帰っていった。彼の障壁はすぐに消えてしまい、次第に商売が繁盛するようになったという⁽¹¹⁾。以上、ここで取り上げた世師の逸話をとおして明らかになることは、世師の

「弟子」である在家信者にとって、世師が呪術宗教的な力をもつ聖者として信じられているということである。世師の教示は具体的かつ明快であり、人びとにとって世師は心の拠り所になっている。世師はシュリンゲリー僧院の「お守り」や「プラサーダ」、さらに「マントラ」などをとおして、人びとに救いを与える。こうした庶民的信仰の様態は、シャンカラ派の哲学文献には記されていないが、長年にわたって伝統的に継承されてきたシャンカラチャーリヤ信仰の一端を示している。

世師は出家遊行者に対してばかりでなく、シャンカラの思想に関心をもつ在家信者に対しても、シャンカラの哲学を説いている。世師の逸話によれば、世師が北インドを旅していたとき、ある在家信者が世師に「出家遊行者 (sannyasin) でありながら、どうして熱心に祈りを行なうのですか」と尋ねた。その問いに対して、世師は答えた、「サンニヤーシンは願望からは自由であるべきです。」しかし、「私たちアーチャーリヤは世界の繁栄を願っています。私たちはどの地域も平和であることを望んでいます。神すなわち全能な存在に私たちが熱心に祈りを行なうのは、こうした願望からです」と言った。¹²⁾ シャンカラ派では、出家遊行者がカルマンやバクティを行なうとしても、それは「人びとのために」(loka-saṅgraha) 行なっていると言われる。

さらに別の逸話では、世師はシャンカラの哲学文献に見ら

れるように、「睡眠」のモチーフによって教えを説いている。ある信者が世師のヴェーダーンタ哲学の話に関心を抱き、ヴェーダーンタ思想の著書を読んだ。ところが、その内容を理解することができなかったため、世師に尋ねた。世師は「真理性」(satyava) について、覚醒 (jāgata)・夢眠 (svapna)・熟睡 (susupta) の意識状態に言及しながら、「この世界は幻妄にすぎない」ことを説いた。古ウパニシャッドの哲人たちは、自己意識を伴わない睡眠の状態に、存在の根源的意識のあり方を重ね合わせて、「ブラフマンとアートマンの一体性」という存在の根源を言説した。熟睡状態において意識するのは、たとえば、『プリハッド・アーランヤカ・ウパニシャッド』(Bṛhadāraṇyakaopaniṣad) が説くように、「唯一の、二元性を離れた見る主体」(eko dṛṣṭadvaitah) である。これがブラフマン (= アートマン) の世界である。¹³⁾ この意識状態では、たとえ一時的であっても、個人のアートマンはブラフマンと一体となり、個体の意識は完全に消滅する。ところが、熟睡状態における意識の深みは、目覚めるとはかなく消え去ってしまう。それは熟睡の意識が覚醒と夢眠の意識状態と同じように、「無明」(avidyā) の種子を残存させているためである。ヴェーダーンタ哲学者たちは一時的に得られるこの熟睡の意識を、修行によって拓こうとした。それが、いわゆる「第四位」(turya, catuṛtha) の語が示唆する「ブラフマンとアートマンの一

体性」の意識である。⁽¹⁴⁾

世師の説教を聴いた在家信者はその内容がよく理解できなかったようで、世師は付け加えてその信者に言う。たとえウパニシャッドの真理を理解することができないとしても、「真摯にヴェエダ聖典に命じられた義務を遂行しなさい。そうすれば次第に、あなたの心は十分に真理を理解できるように浄化されるでしょう。」⁽¹⁵⁾ここで世師が言おうとしているのは、世俗に生きる在家信者にとって、シャンカラの思想を理解することは確かに難しいが、自分に課せられる義務的行為を真摯に実行することによって、その行為がヴェエダリーナ思想が開示する真理の理解へ向けて、「心の浄化」につながっていく、ということである。

三 シャンカラ派におけるカルマンとバクティの意義

さらに、聖典の意味理解に関する世師の逸話を取り上げることにしよう。ある大学生の在家信者がシュリンゲーリを訪れた。そのとき、彼は世師に尋ねた。その問いとは、ヴェエダもスムリティ（聖伝書）もともに「知識根拠」(pramāṇa)であるが、両者が全く異なる見解を示すとき、どちらに従うべきなのかというものであった。この問いに対して世師は、そうした違いが起こるのはごく稀であるが、その場合はヴェエダが常に最高の権威であるので、ヴェエダに従うべきである

と答えた。⁽¹⁶⁾さらにその大学生が尋ねた、「ミーマーンサー文献はカルマンの執行が直接、解脱をもたらすと説くが、このことは不二元論思想と矛盾していないのか。」その問いに対して世師は、次の三つのポイントに言及しながら回答している。⁽¹⁷⁾

- (1) ミーマーンサー文献はヴェエダの意味を理解するための知識根拠 (pramāṇa) である。しかし、ミーマーンサー文献の内容は「知識が解脱のための必須条件である」との事実とは矛盾しない。ミーマーンサー聖典の目的は、カルマンの遂行への信仰を伸展させることにある。その遂行は心の浄化をもたらし、そのことで知識に適合していく。
- (2) 知識の教示 (jñānapadesa) は、だれにでも与えられるというわけではない。それは超日常的な能力と十分に洗練された心の状態を要求するからである。だれもが解脱を願望しているとは言えない。
- (3) ほとんどの人びとは物質的な喜びを求めているが、カルマンの遂行はそれらの達成の助けになる。そのために、ミーマーンサー文献は人びとをカルマンの遂行へいざなうことを意図しているが、不二元論思想と対立するわけではない。

さらに、その大学生はバクティの意義を世師に尋ねる。「宗教の中には、バクティが知識よりも優れていると主張するものもありますが、それは正しいですか。」この問いに対して世

師は答える、「バクティが最も本質的な要因であるというのは、まさにそのとおりです。しかし、そのことは知識が解脱に到達するのに不可欠な要因であるという事実とは矛盾しません。」このように答えたとえで、世師バーラティー・ティー・ルタは続けて言う。

バクティとはなにか。『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』(Vivekacūḍamani)において、シャンカラはバクティが解脱に到達するために最も優れた実質的な助けになると言っています。さらに、シャンカラ師はこのように付け加えて言います、「人(実際には、最高ブラフマン)自らの本質の継続的な瞑想がバクティであると言われる。」このことは真のバクティが確かに、ウパニシャッドに説かれる真理の「聴聞」(śravaṇa)「思惟」(manana)「瞑想」(nidhidhyāsana)から成ることを明らかにしていないでしょうか。ここで私が言いたいのは、「称名」(nāma-saṅkīrtana)などの他の形式のバクティを貶しているわけではありません。というのは、シャンカラ自らが多くのところで、神名を唱えることが大きな徳を与えることになると言っているからです⁽¹⁸⁾。

シュリンゲリー僧院では、シャンカラの著作はヴェーダ聖典の本義を適確に述べたものとして、教義としての意義をもっている。彼の著作の中でも、特に『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』が尊重されている。この著作は解脱へ向けてバクティの意義を強調している。この著作は文献学的にはダニエル・インゴルスも指摘しているように、シャンカラの著作で

はないと考えられる⁽¹⁹⁾。ここで世師が引用しているのは、同書における次の文章である。

解脱「に到達するため」の手段の中では、バクティが最も重要なものである。自らの本質の探究がバクティであると言われる⁽²⁰⁾。

mokṣakāraṇasāmagryāṁ bhaktir eva garvyaḥ/
svavarūpasaṁdānaṁ bhaktir ity abhidhīyate//

この著作にも依拠して、シャンカラ派では、シャンカラの思想をその伝統の信仰に沿うかたちで理解して、バクティの意義を強調している。ここで注目すべき点は、世師が在家信者の大学生に対して、「聴聞・思惟・瞑想」という出家遊行者の伝統的な修行法に言及しながら、バクティの意義を説いていることである。この修行法は、ウパニシャッド聖典の中でも、特に「大文章」(mahāvākya)の意味理解を意図するもので、シャンカラ派では、この修行法は伝統的に出家遊行者によって実践されてきた。その修行法について、世師が在家信者にも説いていることは興味深い。このように同じ「バクティ」の語であっても、それが信仰者の関わりかたに応じて、世師や神へのバクティという真摯な信仰という意味あいから真理の瞑想という知的な意味あいに至るまで、救済論的に多層的な意味構造を示唆している。いずれの形式であれ、バクティは「心の浄化」という救済論的な意義をもっている。

おわりに

シャンカラ派伝統においては、世師と信者のあいだに出家・在家の両レベルで「師と弟子の関係」が存在する。出家遊行者にとって、世師が生身解脱者として模範的な聖者であるのに対して、在家信者にとって、世師は呪術宗教的な力をもつ聖者であり、人びとは世師をとおして現世利益的な救いを求めている。また彼らにとって、カルマンやバクティの実修は「心の浄化」という救済論的意義をもっている。在家信者たちの多くは世師や神へのバクティをとおして救いを求めているが、同じ「バクティ」の語も、信仰者の内面的な関わりかたに応じて、幅広く多層的な意味を内包している。

- 1 Yoshitsugu Sawai [1991], pp. 89-98.
- 2 *Śaṅkaradigvijaya* XIV, 33-36, p. 480.
- 3 シャンカラ派におけるバクティ頌の意義については、拙著「二〇一六」の第四章を参照。
- 4 シャンカラ研究に関する詳しい議論は、拙著「二〇一六」の第一章を参照。
- 5 K. Suresh Chandar, *Illuminating Interactions with His Holiness Sri Bharathi Theertha Saṅkaracharya Mahaswamigal*, pp. 15-16.
- 6 シャンカラの解脱論に関する議論については、拙著「二〇一六」の第八章を参照。

- 7 K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint*, p. 134.
- 8 K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint*, p. 103.
- 9 K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint*, p. 105.
- 10 K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint*, pp. 125-126. シャンカラ派におけるシャラダー神信仰については、拙著「二〇一六」の第六章を参照。ちなみに、現在の世師は、自ら讃歌『シュリー・シャラダーンバー・ギター』（*Śrīśāradāmbagītā*）において、シャラダー神は人びとの願いを叶えてくれることを強調している。Cf. Bharatīrtha, *Śrīśāradāmbagītā*, p. 17.
- 11 K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint*, p. 122.
- 12 K. Suresh Chandar, *Illuminating Interactions with His Holiness Sri Bharathi Theertha Saṅkaracharya Mahaswamigal*, p. 9.
- 13 *Bṛhadāraṇyakopaniṣad* IV, III, 32, p. 900.
- 14 拙稿「一九八七」の一九一二四頁を参照。
- 15 K. Suresh Chandar, *Illuminating Interactions with His Holiness Sri Bharathi Theertha Saṅkaracharya Mahaswamigal*, p. 18. なお、世師は「ベヤーの意味に『夢』、睡眠と関連させ、説明している。詳しくは同書（pp. 22-23）を参照。」
- 16 K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint*, pp. 107-108.
- 17 K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint*, pp. 108-109.
- 18 K. Suresh Chandar, *Inspiring Saint*, p. 109.
- 19 Daniel H. H. Ingalls [1952], p. 7.
- 20 *Ṭivakacūḍāmanī* 32, p. 46.

〈参考文献〉

(一次文献)

Bhāratīṭha. *Śrīśaradāmbagīṭā*. In *Poems by His Holiness: A Collection of Original Compositions in Sanskrit by His Holiness Jagadguru Sri Bharati Tirtha Mahaswamigal*. Sringeri: Dakshinamnaya Sri Sharada Peetham, 2002.

Bṛhadāraṇyakopaniṣad. In *Ten Principal Upaniṣhads with Śaṅkarabhāṣya*, edited by Śrī Govinda Śāstrī Tīppani. Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit, vol. 1. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978.

Chandar, K. Suresh. *Inspiring Saint*. 2nd ed. Chennai: Sri Vidyatheertha Foundation, 2002.

——, comp. *Illuminating Interactions with His Holiness Sri Bharati Theertha Sankaracharya Mahaswamigal*. Sringeri: Sri Jagadguru Shanakaracharya Mahasamasthanam Dakshinamnaya Sri Sharada Peetham, 2004.

Mādhava. *Śaṅkaradigvijaya*. Edited by M. C. Apte. Poona: Ānandāśrama Press, 1891.

Tṛiekacūṭamānī. Traditionally ascribed to Śaṅkara. Commented upon by Candrasekharabharati and translated into English by P. Sankaranarayanan. Bombay: Bharatiya Vidya Bhavan, 1979.

(二次文献)

Ingalls, Daniel H. H. 1952. “The Study of Śaṅkarācārya.” *Annals of the Bhundarkar Oriental Research Institute* 33: 1–14.

Sawai, Yoshitsugu. 1991. “Rāmānuja’s Hermeneutics of the Upaniṣads in Comparison with Śaṅkara’s Interpretation.” *Journal of Indian Philosophy*

19 (1): 89-98.

澤井義次「一九八七」「深層意識の「第四位」——ウパニシャッド意識論への現代的視座——」『思想』九月号、七五九号

澤井義次「二〇一六」『シャンカラ派の思想と信仰』慶應義塾大学出版会

〈キーワード〉 シャンカラ派、世師、救い、心の浄化
(天理大学教授・PhD・博士(文学))